



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065
 編集 早川 清志
 題字 島崎 洋路

『さあ!! 次のステージへ』

『さあ!! 次のステージへ』

今年には本当に寒く、雪の多い冬でした。青森県の八甲田山の麓、ヒバ千人風呂で有名な酸ヶ湯温泉では、積雪が5mを大きく超え、気象庁の観測点での過去の記録更新などというニュースも飛び込んできました。ここ伊那市界隈でも最低気温がマイナス12度を下回り、また積雪もここ数年にない量で、大変厳しい冬でした。

そんな雪がまだ10cmほど残る3月初め、KOAバインパークで、今年度最後の通年コースが行われました。卒業式はさくらの咲く時期、というイメージがあるのですが、相場崩しの雪の上の伐倒が締め切りです。

皆さんのスキルは昨年と比べ、当然のことながら一段にアップしています。でも癖悪く伸びたアカマツを自由に倒すという、プロ並みにはもう一歩というところで、景気良く倒す班もあったものの、軒並みかかり木にしてしまう班もありました。

強風に加え雨もぼつぼつ降ってきたため、少し早めに切り上げてみっちりチェインソーのお掃除と目立。そしてその後は伊那市みはらしファームの「トマトの木」にてバイキングでお別れ会。島崎先生も駆けつけてくださり、楽しい時間を過ごしました。でもちょっと食べ過ぎ?

雨が上がったものの、肌寒いなか、二日目の実践も終わり、いよいよ修了式です。一年目の方のなかで、18回の皆勤賞が大澤さん、金子さん、小林さん、そして高橋さんの4名の方でした。本当にありがとうございました。特に金子さんは東京からの皆勤賞。頭の下がる思いです。そして和泉さんと板山さんは精勤で、こちらもお疲れ様でした。途中からご参加の飯塚さん、佐々木さん、藤田さんは残念ながら少し出席日数が足りませんが、出陣が、お忙しいなか、よく通ってくださいました。OB参加の熊木さん、水野さんも含め、本当にありがとうございました。どうか、ごいよいよ、泣くな 友よ 惜別の時



雪の中の最後の実践になりました



修了式で島崎先生の檄(?)が飛ぶ



お別れ会はバイキングで満腹です

飾らない笑顔で さあ
 またどこかの現場で
 会いましょう
 翌日の3月3日に開催されたという第1回金子プロジェクト(仮称)など、次のステージはもう始まっています。伊那市周辺でもよし、あるいは戻られた地元で、どんな形であれ、今後とも山の手に入りに関わって、森林の応援団になっていただければ嬉しい限りです。

すっかりきれいになりました
 私にとって森林と呼ぶより山と呼んだ方が親しみ深く、春、タラの芽、コシアブラ等の山菜狩り、秋、マツタケ、コウタケ、雑きのこの等、キノコ狩りの場所であって、長い間、森そのものに目を向けることは無かった。
 10年ほど前の事であった。正月のTV番組で『田舎の爺さん風』の人がアナウンサーと対談していた。NHKの番組だったと思う。この内容に興味を覚えたので、その後、爺さんが書いた本を手当たり次第読んだ。麦わら帽子をかぶりゴム長靴を履き、全国各地、いや全世界を『植樹』にとび回るスーパーカントリー爺さんの名前は『宮脇昭』。生態学者、横浜国立大学名誉教授(現在の肩書は定かでない)。尚、島崎さんは宮脇昭氏と同じ年だと、お伺いした。森林を取り巻く生態系(自然環境)に関心を持つキッカケを作っ



みんなで受け口の方向を再確認

リレー通信

されどわれらが山河
 横川 又司

てくれたのが「会ったことも無い宮脇翁」の主張だったのです。

宮脇イズム

宮脇昭『Wikipedia』から抜粋

翁は「スギやヒノキ、カラマツ、マツなどの針葉樹林は、人間が材木を生産するために人工的に造林したもので、人が手を入れ続けなければ維持できない。現在の針葉樹では20年に1回の伐採と3年に1回の下草刈りが前提で、それをやらないと維持できない偽者の森である。マツにしても、元々条件の悪い山頂部などに限定して生えていただけのものを人間が広げてしまったのだからマツクイムシの大発生は自然の摂理である。その土地本来の森であれば、火事や地震などの自然災害にも耐えられる能力を持つが、人工的な森では耐えられない。手入れの行き届かない人工的な森は元

に戻るのが一番であり、そのためには2000年間は森に人間が変な手を加えないこと。2000年で元に戻る」と言っている。

森林塾との出会い

その頃、近くの書店で平積みされた本の中に『おーい山へ行くよ』を見かけ、興味がてら購入し斜め読みした。しかし、当時、仕事が忙しくて森林塾に申し込むことができなかった。『おーい山へ』は2005年に上梓されているので、7年間は、温めていただけで、何の進展も無かったのです。

2011年秋に定年を迎え、再雇用制度の恩恵をこらうむる中、時間にゆとりができたので2012年秋の集中コースに申し込んだ。チェンソーの扱い方よりも、徐々に増してきた疑問を解決したい願望の方が大きかった。つまり、森林塾は「荒れた森林を手入れすべし」と言



と、放つて置く。主張する。欲しい、どこ

らが正しいのか？

3日間の講習中では解決できなかった疑問は、その後の鳥崎さんとの会話や書簡のやり取りで少しずつ整理されてきた。

森林塾VS宮脇イズム

『比較すること自体ナンセンス』が、最近到達した答えである。KOA森林塾は「人工林再生」を理念としている。先人たちが造林した後、荒れている山を、チェンソーを使って手を入れようと云うことがコンセプトだと思

う。現実を起点とし、森林の果たす役割を木材生産機能に置いて、いかに効率的な林業経営をするかと云う農林業が出発点ともいえる。

一方、宮脇イズムは「天然林再生」と表現して良い。森林の環境保全機能に注目し、自然科学と言う学問からのアプローチである。すなわち、森林を生態系の一つとして捉え、マクロ的に森林を研究した結果である。これは、宮脇翁が出版した『日本植生誌』中部編の編纂者は理学部や教養学部の「学者」が占めていることからもつかげえ

る。両者の立ち位置が違い、森林に対する視点が異なるので、正誤、優劣の比較すること自体が意味のない事だと結論に思い至った。理想を追求した「べき論」と現実と

の融合が、今、追い求める森林の姿だと自分なりに理解した。たかが「森造り」にも、過去の学生運動の様に色々な主義・主張がある事を知った。

おわりに

昨年末、キノコ狩りの合間に拾ったどんぐりの実をプランターに播いた。春には芽をポットに移植し2、3年育て、林道が開削された裸地に植えたいと思う。森を育てるには、数百年の歳月が必要となる。立ち会えなくても、見果てぬ夢に向かい、出来る事から始めたいと思う今日この頃である。

興味ある方はご参考に

- 宮脇昭氏の代表的編著書
- ・ 苗木3000万本の森を生む
- ・ 鎮守の森
- ・ 日本植生誌 その他多数

リレー通信



少年Aの夢 湯澤 充尋

私がKOAの森林塾に通い始めたのは、一昨年、二〇一一年の夏からです。当事高校一年生だった私は、親に勧められて森林塾の門を

叩きました。自然が好きで、それを守りたいと思って上伊那農業高校に入学したのですが、最初は林業という仕事に足を踏み入れることに抵抗感がありました。しかし、「部活と学習をなんとか両立していてもダメだ」と思い、とにかく森林塾の事務局に電話をしてみることができました。聞いてみると、

通年コースに土曜日のみで途中から参加しても大丈夫だということ、通うことを決意しました。初めて大人の中に入った時は正直かなり緊張していた、その上チェンソーを使うとなると膝ガクガクしうでした。いや、冗談じゃなく本当にヤバかったんです！しかし、皆さんが高校生の私を快く迎えて下さり、熱心に指導していただいたおかげで、今、こうして二年目を無事に過ごしています。あ

りがとうございます。そして今後ともよろしくお願います。今になって振り返ってみると、私は森林塾に通い始めた事が、ひとつの転機になったのではないかと気ががします。知らない人の中に入ることに少し慣れたからか、学校を通して参加する研修に積極的に出るようになりました。そのひとつが、昨年の夏に行った、県内の高校生

対象の林業研修です。二泊三日で塩尻市の長野県林業総合センターと木曾町の長野県林業大学校を巡りました。山づくりだけでなく、製材・加工・利用の分野まで幅広く見ることが出来ました。チェンソー実習では森林塾のおかげで素晴らしい所を見せられました。この時、実際に林業マンに話を聞く機会もありました。その人は松本の森林組合で働く二十代の若手林業マンで、伐倒も見させてもらいましたが、本当にカッコ良かったです。しばらくカッコ良かったです。しばらくカッコ良かったです。しばらくカッコ良かったです。

もうひとつ、森林塾の外に出て感じたことは「林業界の狭さ」でしょうか。これは前述した林業マンの受け売りです。彼は森林塾やディーエールディーをよく知っていました。また、この研修で、林業センターの役員さんや、林業大学の校長先生にお話を伺う機会もあったのですが、皆、森林塾と聞いて、「ああ、鳥崎先生の...」あの早川さんの...といった具合でポンポンと話が進みました。ちょっと嬉しいですね。いろいろな人に会ったこ



とが、将来何かの縁になればと思えます。

こんな感じで森林塾は、私の生活の中でけっこうたくさん出てきます。「あの時行ってみて良かった。」と心から思います。実は同じように、「あの時この本を読んだ良かった。」という本があります。三浦しをん著「神去なあなあ日常」です。中学三年の時に出会った本なのですが、これを読まなかったら森林塾どころか上農高校にも行っていなかったかも知れません。物語は、都会育ちの若者が、高校卒業と同時に山奥の小さな村に放り込まれ、林業の仕事をしつつ覚えて成長していくというもの、基本的にユルイ。主な産業が林業の村だから、住人は焦らない。焦っても木は育たないから。そして変な風習がたくさんある。なんとなく憧れる田舎の姿がそこにはあって、自分の住む伊那谷

も！
と今
では
思っ
てい
ます。
もつ
と現
その
中

山々は荒れ放題ですから、これが焦らないでいられるか！とも思っています。ああ、早く働けるくらいの技量が欲しい。個人的には、そんな夢(妄想?)の膨らむ一冊です。まだ読んだことのない方、ぜひどうぞ。
さて、書きたいことはたくさんあったのですが、何だかゴツチャになってしまいました。それもこれもテストのせいです(笑)。先程、進路に向けて勉強中と書きましたが、本当にやっています。例えばドイツ語、いつか向こうに渡りたいと思っています。林業や環境技術の最先端と言われる国を見に行きたい。そう思っています。もちろん、大学に行くために普通科目や農業科目を優先してありますが、
恐らくここまでする私は学校ではちょっとした変態です。少数派です。それでも、KOA森林塾で学んだこと、

身につけたものは一切無駄にしたくないから、異端であることと突っ走ります。ちょっと格好良くないですか？異端者って。何十年も経つた時、その異端者が日本の林業、田舎の最先端になっていられるように、努力しようと思えます。
今年の森林塾も余す所あ一回ですが、残念ながら卒業式と重なって出席できずうにありません。最後になりましたが、この場をお借りして一年間のお礼のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。



さてまた1年が過ぎようとしているが、これといったトピックに乏しかったためか、月日の経つのがとても早かったように感じてきた。話題に乏しいというよりも森林や林業の現実が話題性のない淵に沈みかかっているように思われる。15年ほど前

「甦らせられるか日本の山」なる拙文にて当時の社会・経済の背景の下でわが国森林の維持管理や林業活動の在り方について、私なりの提言を試みてはきた。しかしいくつかのコラムに挙げたように、それらの課題への対処はきわめて容易でないことが伺われる。
内容の良し悪しはともかく国土の三分の二を覆う2500万ha余の森林群は世界1級の生育環境条件下にあって、(第2次大戦の)戦中・戦後の乱伐跡地は見事に甦り、昨今の森林蓄積量は50億立方メートル余りと見込まれ、年々の成長量も1億立方メートルほどと推計される。

一方、高度成長期を通して年々1億2000万立方メートルほどに及んだわが国の木材消費量は、昨今の経済不況による住宅建築の不振が引き金になって7000万立方メートル台にまで激減してきているが、国産材の供給量は1990年代半ば以降1700万立方メートル前後の横ばいで推移しており、国産材供給のミスマッチが続いている。外材主導の供給体制に伴う材価の低迷と年俸300万円にも満たない厳しい労働事情が改まらない限り、比類のないわが国森林からの

恩恵は当分の間お預けということになりそうである。
2012年度KOA森林塾通信のコラムを終えるに当たって、森林・林業に携わる者の一人として明るく豊かな展望のひとつもお伝えしたかったが、そうした希求を胸に今しばらくのお付き合いをお願いしたい。
^ 島崎 洋路 ^

特別寄稿 (再掲)

一人親方のまじめなたわごと 島崎 洋路

消え入るような訴えのうめきが聞こえてくるようになりません。
「日本の皆さんよ、もうちょっと私たちの面倒を見てくれませんか」「いろいろ忙しいようですが、もう少し私たちに近づいて遊んで下さいよ」「あんまり放っておかれると、私たちは皆さんのお役に立てないかも知れませんよ」。

まえばき
私はいつも「日本の山はどうなるのか」と憂慮しながら好きな山仕事に向かっています。温暖多雨に恵まれた風土のなかで日本の山々は、一部に「マックイムシ」などの被害は見られるものの、遠目には緑豊かに私たちの環境を彩ってくれています。
確かに四季折々に風情を変えながら、第二次大戦後のあの痛ましかった四囲の山々はこの五十年間に「見事に甦ったものだ」という感慨は一人です。
しかし一歩山に踏み込んだとき、そこにたえずむ木々たちの姿に接すると、彼らの

せつかくの恵まれた風土を満喫しきれないでいる木々たちの声に、ただただ相済まなく思っている今日この頃です。
国土の66%が森林で覆われ(森林率)、その森林の40%余りもが人工林化されていて(人工林率)、世界一の森林国を標榜しているが、なぜか消費量の80%もの外国産の木材を輸入して、「木の国」は栄えているのです。国民一人当たり毎年1立方メートルの木材消費量も断トツに世界一、水や空気ほどではありませんが、木材製品(主に製材品や合板)や紙類はいつでもどこでもふんだんに私たちを取り巻いています。
世界人口の80%を占める途上国や後進地域では、乏しい森林資源のなかから(世界の森林資源はすでに30%を割っています)木材消費量の80%にも及ぶ燃料用の薪を

求めて、今日も遠く離れた山々に向いている人々の姿が切なく想い浮かびます。因みにわが国の薪炭材需要量はわずか0.5%、ゼ口も同然なのです。

飢饉と飽食が同居する世界のなかでのわが国の減反政策と機を一にして、木材輸入一等国での森林の放置、間伐材等の切捨てが横行している日本の山々は、これから一体どうなっていくのだろうか。一・三次産業の隆盛のおかげとはいえず、その辺にも一抹のかけりがささやかれる昨今、二十一世紀を迎えて“列島沈没”などというところを避けるためにも、山のふとこころで思案のひとつを過ごしてみたいと思います。

甦らせられるか日本の山

一昨年の夏、地元林産組合が開設してきた原木市場がひっそりと閉鎖され、残された県産連の市場でも樹種のいずれかを問わず小径材や曲がり材の売れ行きがはたと途絶えた。また格別な一部の優良材を除いては軒並み2~3割を超える大幅な材価の値下がりに見舞われ、林材界の凋落がいつそう実感されてきた。



「再掲 KOA森林塾通信 1998年度第15号より」

後もたやすく取り除かれる状況にはない。

林材界の急激な不振は、ここ20~30年来じわじわと低落し続けてきた林業活動に引導を渡している如く、在来型の林業は終焉の期を迎えている。

そして林業活動の不振は私たちをめぐる森林の姿に反映し、各地に惨憺たる有様の林層を露呈してきているのである。

日本の森林が駄目になったのは、天候不順のためでも、病害虫や風雪害のためでもない。はつきり言って関係してきた人々の考え方や行動の問題である。行政や政治、学会、試験研究機関、関係団体、森林所有者等の心根の軌跡を思い起こせば納得できる事柄ではなからうか。山のふところや裾野にたえず集落はあっても、住む人の足は老いも若きも麓の町や都会に吸い寄せられ、人っ子一人見当たらない山が多くなってきた。後背に広

がる何千、何万ヘクタールの山々は人々の出を待つて、森・閑としたまま放置されて久しい。3年、5年ではない。20年、30年にもなる。

この間、自然だ、水だ、緑だの声は巷間にまで叫ばれてきたが“山守り”のいな

い森林の惨憺さは“知る人ぞ知る”である。たった20年、30年の間の出来事である。“やればできることをやらない”、“見て見ぬふりを

する”風潮に慣れてしまつた日本人が、この惨憺たる有様を糺していくことは尋常な構えでは果たされない。一見放棄されたと思われような森林は、奥山は云うに及ばず里山のいたるところにまで広がり、わが国の森林面積の7~8割にも及んでいるのである。健全な森林が不要なもので、木材が不要なものでない。それどころか環境保全が、公益的機能の必要が声高に叫ばれ、木材需要の80%もを外国産材に依存している国民のなせる業が、こつした森林の荒廃を招いてきたのである。森林や林業の関係者にその責を問うても、寂として応答しよ

うのない憂慮すべき事態が、国土の三分の二を覆う森林地帯にのしかかっているのである。もはや手をこまねいてい

る余裕はない。できる人がやらねばならない。山造りは不可能な事柄ではなく、やればできる営みである。余暇を持て余している日本人のほん

の一握りの人々の真摯な営みを借りることによって、衰えていく、地球上の一角を占めるわが国の森林を、せめて日本人の手で甦らせたいものである。

そのために、森林や林業に閉係する、あるいは関係してきた人々がなすべき事柄は、過去のしがらみなどにとらわれないこと、昨今の森林や林業の逼迫した事態を、一般国民あるいはそれぞれの地域の人々の前に赤裸々に伝えることではなからうか。そのうち何とかなりそうなる御託ばかり並べ立てて、現場での営みを怠つたままの森林文化論はもうたくさんである。対策、対策などだけで現状の窮状が救えないことは、ここ10年、20年の経緯を見れば明らかである。“21世紀は云々”と展望めいた言辞が飛び交うなかで、地球上で最も恵まれた環境条件下にあるわが国の森林群は今日も劣化の一途を辿っているのである。

『物事の是非を問いながら、その物事に対する対応の積み重ねが、人間社会の文化である』とする私の理解に立つならば、それぞれの立場で森林の利用とその維持管理にかかわる人間の営みが滞つては、森林文化の展開は期待できそうにない。森林の公益的機能は年々39兆円にも及ぶと公表されてはいる

が、昨今500兆円にも及ぶ国内総生産額のわずか0.1%にも満たなくなつてきた林業総生産額(4000億円ほど。ほとんど無いも同然)や、かつて40~50万人を要した林業就業者数が8万人前後にまで激減してしまつた現状では、産業としての日本林業の存亡が問われているのである。

日本の山々を甦らせるためには、どうしても関係する人々の心根が糺されなければ果たされない。そのためのノウハウはすでに十分過ぎるほど用意されているし、わずか10~20万人ほどの真摯な“山守り”と年間数千億円ほどの資金さえ直接山造りに投入できれば、やつれが目立つ日本の山々ではあつても、そこそこの再生は可能である。現世のわれわれの手の届く範囲内の事柄であるだけに、できるだけ多くの人々の支援を得ながら、難しい議論や手続きは抜きにし

て、孫子の代にかけがえのない贈り物をしつらえたいものである。早急に本物志向の同志が多数輩出することが待たれる。

おわりに

2012年度のKOA森林塾もおかげさまで無事終了しました。塾生の皆さん本当にありがとうございました。第19期の皆さんは地元山持ちさんを中心となり、早速次の活動を始められたようにです。怪我をしないようにして、長く続けられたらいいですね。

さて、森林塾20年目の2013年度は伊那谷の春本番の時期、4月27日(土)の植林から始まります。本物志向の同志よ集まれ!!今度の植林はハードなようです。そして物見遊山の同志の皆さんもサクラを見物ながら、是非一緒にどうぞ。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望は事務局まで。 TEL 0265-70-7065 FAX 0265-70-7994 E-mail: mi-matsuoka@koanet.co.jp ki-hayakawa@koanet.co.jp 携帯:090-4463-0062(開催日) URL http://www.koanet.co.jp